



グローバル化とアカデミア Sustainable Academia under Globalization

規格調査会委員長 浅谷耕一

近年、あらゆる分野で「グローバル化」が徘徊している。

その一つに、大学の世界ランキングが挙げられる。これは、教育環境、研究論文数、論文被引用数、ノーベル賞受賞者などの指標を数値化し、順位付けを行うものである。各国から幾つかのランキングが毎年発表されている。いずれにおいても上位10大学は米国と英国の大学である。これは、指標が英語圏の大学に高得点が出るようになってきているからである。

学会論文誌がランキング評価指標の対象論文誌として評価が高くないと、高ランクの大学の論文投稿が得られにくい。したがって、高評価でない論文誌の引用される機会も少なくなり、評価は厳しくなる。更に、学術出版系の（電子化も含む）論文誌が、学会論文誌の手ごわい競争相手であり、優れた論文の取り合いになっているようである。学会も大学と同様に広い意味での世界ランキング化が進行しつつある。

日本の、アカデミアを取り巻く環境は大きく変わってきた。目先のアウトプットが過度に重視され、もうけにならない学科・学部は存続が危ぶまれている。一方、従来の学問の範疇に入らない、名称からは何を対象とする学問なのかが分かりにくい新しい学科、学部が続々と誕生している。

学会が先導的役割を果たすためには、新分野を意欲的に取り込むことも重要であるが、目先の利益、効果、効率にとらわれない本質的な基礎的分野の支援も大きな仕事である。

さて、電子情報通信学会のようなICT関連学会の世界共通の課題として、産業界の学会参加が継続的に減少し、学生の参加が多くなっていることが、経営的問題がある。特にICT技術の急激な発展により、比較的安定な経営基盤を持っていた伝統的な通信関連企業に加えて、異なる理念や行動様式を持つ新しいICT企業が主要なけん引車となりつつある。

このような環境変化に対応するのに各国の学会は四苦八苦している。例えば筆者がDirectorを務めるIEEE Communications Societyではタスクフォースにより組織改編を含む種々の努力が進行中である。

学会の主要な役割は、教育・研究支援を通じての会員へのサービス、社会へのサービスである。後者の一つに標準化活動の支援がある。

元来国境のない理工系の研究はグローバルである。技術標準や知的所有権についてもグローバル化が進行中である。

様々な分野の学会が標準化活動を直接的あるいは間接的に支援している。国際標準は、特に1995年のWTO(世界貿易機構)のTBT(貿易の技術的障害)締結以来、その重要性はますます増している。

Webで「標準化、重要性」を検索すると、日本の様々な分野の技術リーダーあるいは標準化活動組織が国際標準化の重要性を訴えている。関係者が重要性を理解しているのであれば声高に訴える必要もない。すなわち理解されていないのが問題である。

国際標準化は、各国の独自開発技術をいかに国際標準にするかといった従来のガチンコアプローチから、国際標準の重要性の増大に従い、国際標準化組織が技術開発ロードマップを描き、研究段階から標準化を並行して進めるといったパートナーシップアプローチに変化してきた。このように標準化を取り巻く環境も大きく変化している。

電子情報通信学会規格調査会は、歴史的な経緯からIEC(国際電気標準会議)の多くの技術委員会の支援を行ってきたが、上に述べたような研究先取り型の国際標準化のアプローチに対応してその取組みについてもそろそろ再考する必要がある。

規格調査会では、光アクセスネットワークのような新しい技術分野の標準化の支援を新たに始めた。更に、様々な場で指摘されているグローバル人材、国際標準化に必要な人材の教育を検討する委員会を立ち上げた。検討結果の一部は興味を寄せる大学にフィードバックするとともに、ITU-Tのカレイドスコープなどにその成果を発表し、国際的な連携を模索している。

関係各位の御協力の下に更に改善を図りたいので、絶大な御支援を乞う次第である。